

## ベトナム戦の被害女性に会って

黄點順 (ファン・ジョムスン)

### 1. はじめに

われわれ一行三名（前・挺対協代表の梨花女子大の尹貞玉教授とYTV放送局の次長さん一名）は去る3月15日から26日まで12日間ベトナムに行ってきた。

ベトナム踏査が可能だったのは尹貞玉先生が、2000年12月東京で日本軍性奴隷女性国際法廷が開かれた時、ベトナムのハノイから参加していたCGFED(Center for Gender, Family and Environment in Development)のレ・ティ・ニャム・トゥエット(Le Thi Nham Tuyet)教授とファム・キム・ゴック(Pham Kim Ngoc)総務に会い、ベトナム戦争中、韓国軍にレイプされた女性と韓国軍2世に会いたいという意志を話したとき、トゥエット教授がこれを受け入れてくれたからである。それで5年3ヶ月ぶりに今回の踏査が実現したのだ。

本格的な踏査に出る前に、私たち一行は3月16日～7日の2日間、ハノイで開かれた国際会議に公式招待を受けて参加した。その国際会議は、ベトナム戦で使用された枯葉剤(ダイオキシンの)犠牲者たちとその後遺症に関する科学的調査の報告会議であった。世界各国から155人の参加者が、発表者の多様な資料と凄惨な実態報告を受けて熱気を帯びた質問をした。自ら体を動かすこともできない被害当事者の女性の1人は、苦痛の中でも気丈で毅然とした姿を見せてくれたし、参加者の無事と幸福を祈りまでしてくれて肅然とした雰囲気醸し出した。会議場には戦争兵器が人間を不幸のどん底に追いやった生々しい証拠が写真で展示されていた。それらは、顔の片方が伸びて目を塞ぎ頬が首に達していたり(写真:会議場に展示されていた中の一つ)、生まれつき目が一つしかなかったり、皮膚に動物のように毛が生えていたり、うつ伏せた状態から起き上がって座ることもできなかつたりした。枯葉剤の後遺症は当事者だけでなく2世3世にまで転移しており、女性たちには二重三重の苦しみを抱えさせていた。



私たち一行が行ってきた地域は、韓国軍が駐屯していたベトナム中部地方の5つの省で、クアンナム省(Quang Nam Province)のタナンから出発してクアンガイ省(Quang Ngai Province)、ビンディン省(Binh Dinh Province)、フーイエン省(Phu Yen Province)の村々を歩き、集団虐殺から生き残った男性3人と、レイプ被害女性12人と、韓国軍2世2人、そしてその子どもたちに会い、カインホア省(Khanh Hoa Province)のニャチャンから再びハノイへ戻ってきた。訪問期間中ずっとCGFEDのダウ女史(Ms. Dau)が同行して、日程を調整してくれ、省と県(District)の女性連盟から指導者の方と会員たちが直接いっしょに歩き、人民委員会(People's Committee)の委員長のところ案内してくれた。委員長と村の村長さんも私たちといっしょに直接、被害者たちに会いに行き、私たち一行は通訳と記者を除いても10人を超え、小型バス

でも足りずにオートバイに乗って一緒に走ったこともあった。

被害者の方々が都市から遠く離れた（遠くは80キロ以上）山あいの奥地に住む方々や、海を渡らねばならない村に住んでおられたりしたので、その地域の女性連盟の方々の案内なしには、到底、訪ねて行くことも会うことも出来なかつただろう。私たちが訪問した地域の委員会の皆さんと女性連盟の皆さんに本当にありがとうございます。さらに尹貞玉先生がずっと前から計画しておられ、長い間ハノイのCGFEDと連絡を取り合って彼らが日程を前もって準備してくださったおかげで、短い期間に多くの方々と会うことが出来た。ハノイCGFEDのトゥエット教授とキム・ノック総務、そしてダウ女史にもたいへん感謝している。そしてもう一つ、私たちの意思疎通が全面的に二重通訳（ベトナム語－英語－韓国語）に依存するほかに、したがって正確さが多少落ちるかもしれないことを明らかにしておく。

## 2. 民間人集団虐殺のあった村々

私たち一行が最初に訪問した場所は、クアンガイ省のビンホア村だった。まず人民委員会事務所を訪ね、私たちの訪問目的を知らせ一種の許可を得なくてはならないようだった。その人民委員長が最初は固い語調で民間人虐殺の状況を説明した。村長にあたる方も付け加えて説明をしてくださったし、慰霊塔を参拝するときには保安担当者も2人、オートバイに乗って現れた。個人的な訪問なのに何故、警察の方々まで同行するのかという質問に、通訳は私たちの安全のためだと答えてくれた。初めは監視されているような気がした。しばらくして私たちが昼食をしに入った食堂に1人の男性が入ってきて大きな声でひとしきり叫ぶように話をした。私たちのせいかという問いに皆ちがうと言ったけれども食堂には私たち以外にはいなかったものでどうやら私たちに向かってしている話らしかった。私たちを保護しようとして同行してくれていると思ったら有難い気持ちもした。



最初の訪問地として慰霊塔を訪問したのは道理に合ったことだった。韓国軍による村の民間人集団虐殺が行われた場所なので心が重かった。私たちは線香を上げて黙祷し犠牲者たちが合同埋葬されている円の周囲を回ってみた。（写真）円内に何百人がいっしょに埋葬されていると想像すると胸の中が苦しくなってきた。その中に自分の身内が入っていると考えて見よ。そこをどうして涙なしに通り過ぎることができようか？男たちは昼には山に隠れていたの、ほとんどが女性と老人・弱者である村人たちにキャンディーやお菓子を分けてやり、その次には集まれと言っておいて銃撃して殺し、刀で刺して殺し、妊産婦や幼児もみさかいなく殺したなんて、生き残った人々の恨（ハン）になって残っているのが当然だろう。その村に生存者が住んでいるので会うことにした。

ドアン・ギアさんは生存者5人のうちの1人で当時7ヶ月だったが、集団射殺のとき母親が両腕でかばって抱いていたので生き残ったという。祖母と母と姉が死に、兄は生存しているという。当時は大丈夫だったが、後に両目が失明して今はまったく前が見えなかった。どのようにして生活しているのかという質問には、妻が農業をして自分は炊事と家事をしているといい、自分が働けず生活が苦しいといいながら、2人の子どもが学校に通っているが遠いのでオートバイがあればいいのと言った。ドアン・ギアさんの妻は野良に働



きに出ていて会えず、小学生の彼の息子と娘に会うことが出来た。広い野原を渡り、二番目の証言者の家を訪ねる道は車が入れず尹先生は女性連盟の方のオートバイの後ろに乗せてもらって走った。(写真) グエン・ニエムさんの家は花が美しく手入れされたきれいな家だった。最初の妻と息子と娘が死に、当時3ヶ月だった息子と自分だけが助かったという。当時35歳の教師であったといい、今も端正で知識人のような雰囲気が漂う。自分の気持ちを込めて直接作った詩を読んでくださった。再婚した妻と、こじんまりと平穏な生活をして

おられるので、訪問した私たちの気持ちもドアンさんに会ったときよりは少しは軽かった。

2つ目の訪問先の村の人民委員長は、非常に官僚的な態度で私たちを迎えた。尹貞玉先生の謝罪の挨拶にも「韓国女性には過ちはないから謝罪する必要はない。過去は全部不問にしよう。今は仲良くしているのだからそういう話は持ち出さずに未来を開こう。韓国軍2世は外交的には (diplomatically) いない。」など官吏たちが一様に繰り返す固いお話だけをされた。しかし殺害されたという180人の名簿は下さった。(写真)



その委員長さんの案内で二番目の慰霊塔を訪ねた。その村の委員長は、もっと大きな慰霊塔が必要だとおっしゃったが、私たちが見たところでは慰霊塔の周囲の整理されていない虐殺現場の景観を整えること必要ようだった。そこで祖母といとこたちなど、親戚が犠牲になったという2人の女性の証言を聞いた。証言者たちは生活が苦しいと、経済的な困難を訴える反面、女性連盟の方々健康センターや子どもセンター、女性センターのようなものが村に必要なとおっしゃった。

慰霊塔がある3番目の村として、タイヴィン村の委員会事務所を訪問した。1966年1月から3月にかけて合計15カ所で起こったもので、犠牲者は全部で1004人だという。ゴダンという村だけで380人が犠牲になったという。レイプを受けた人々のうち、2人の女性に会うことができるそうだ。まず慰霊塔を訪ねることにした。とてもきれいでよく整頓された慰霊塔だった。(写真) ところが慰霊塔に刻まれた彫刻の絵を見た瞬間、背筋が冷たくなってきた。どんな説明の言葉も必要なかった。勇敢な猛虎部隊の勇士たちがベトナム人を虐殺したという内容のモザイク画によって生々しく証言していた。貧しい経済事情にも関わらず、



どれほど心に沁みたらこのように見事に作って置けたらどうか? 「過去は済んだことだから不問にして忘れてしまおう、未来を開こう。」という言葉は、機関長たちが一様にいうことだが、それは政策的にいう挨拶に過ぎないものだということを見逃してはならない。ベトナム人たちは不問に付して忘れてもいなかったし、また忘れようともしていなかった。ベトナム政府が「過去は不問にしよう」と主張しても、犠牲者たちは不問にできないのだ。彼らは毎年、追慕の日を決めて慰霊祭も行い、忘れないように努力していた。

慰霊塔の参拝のあと、証言者に会いに大きな川を渡った。

牛たちがのんびりと草を食っており、川辺の景色はうろわしかった。竹が生い茂り、木橋がかかった村は、眺めただけでも心が安らかになった。戦争が起これば、善良だった人々も急変し、悪辣に人々を殺すことができるが、これはももとの人間の本性に悪魔性が内在しているからなのだろう。生きてきた中で、そんな状況に置かれなかっただけで、同じ状態に追い込まれば私もそうするのではないだろうか？私の中の悪魔性は、どのように統制することができるのか？私が安穩に生きてこられたのは、私の自力ではなく、私の周囲の皆さんの恩恵という保護装置があったからのようだ。駐ベトナム韓国軍初代司令官（1965 - 69）を務めたチェミョンシン氏は「人間が不安定で感情的な動物だということを念頭に置いてこそ、戦争の本質を理解できる」とハンギョレ新聞とのインタビューで語った。さらにベトナム戦ではベトコンと民間人を区別できなかったという状況論理も展開する人たちも多い。そのような状況論理は、光州虐殺で「暴徒」と市民を区別できなかったという論理につながる。その人たちが、特に女性と子どもが仮にベトコンだったとしても、私たちが殺す理由のなかった戦争であった。そして不幸なことは、不安定で感情的な動物によって、弱者である女性と子どもたちの苦しみがベトナム戦においてのみならず、今もずっと繰り返されているということだ。なぜ人間は歴史から学ぶことができず過ちを繰り返すものなのか？

コン川を渡って到着した村では、脱殺の真っ最中であった。ベトナムは三毛作をするので、同じ平野でも一方は田植えをし、一方は脱殺をすることもある。グエン・タン・ラウさんは1966年民間人虐殺の当時、16歳であった。それで比較的はっきりとした記憶で証言してくれた。（写真）午前6-7時ごろから人々を集めておいて、銃殺したという。母親が亡くなり、銃で撃たれた姉は夜11時まで苦しんで死んだと泣きながら証言をした。彼は、「この話は長い間することができなかった。しかし今はする。韓国軍の1人1人と韓国のすべての人がこの話を知らねばならないと思うからだ」と語った。これ以上、辛くて話せないと泣きながらいう話は聞いている人も同様に苦しめた。20人を超える市場にいた女性たちを集めておいて服を脱がせ半分くらいかがんだ姿勢を取らせて周りを回りながら見物してから銃で撃ったという場面では言うべき言葉がなかった。

ビンディン省の女性同盟事務所に行って、レ・ティ・トゥエット・スオン会長の説明を聞いた。「経済的に貧しい。生活を改善できるように助けが必要だ」という趣旨の話をなされた。ふたたびニョンフォン地域人民委員会の事務所に行って、レ・ティ・タイン・フオン委員長の案内の言葉を聞いた。この地域では多くの子どもと女性たちが生き残ったが、すべて引越したりして現在は3人いるので会わせてあげようとおっしゃった。そしてみんな一緒に慰霊塔を訪ねた。（写真）1896年生まれから1963年生まれまでの23人が1966年1月6日に虐殺された事実を、名前まですべて彫り込んで、文字を知らない人々も皆が分かるように彫刻でその内容を刻んであった。彼らは忘れないようにしようと毎年陰暦で12月17日に法事を行っているという。私たちが訪問したすべての慰霊塔には南朝鮮軍人たちが殺したと刻まれてあった。この耐え難い事実をいかにすべきだろうか？慰霊塔の下で会った町内の子どもたち2人がどこかへ忙しく駆けていったと思ったら、カボチャの花



を二輪摘んできてくれた。花のプレゼントまでもらったので心の中はあっさり重苦しくなった。

日が暮れて四方が真っ暗になったが、私たちの日程はずっと続いている。(写真) 私たちが行ったホアヒエップナム村には、何も書かれておらずビア・カム・トゥとだけ書かれた横4メートル、縦10メートルの非常に大きな慰霊塔が建てられていた。「苦痛な」(painful)という意味だという。韓国軍が村の住民をすべて埋めて殺し、家にも火をつけたので地べただけが残ったところで、「砂の村」(Sand Village)と呼ばれたという。その村で生き残った人がいないので死んだ人々を知ることもできないという。その韓国部隊は白馬部隊だったそうだ。追悼の日は陰暦の12月26日だという。ダオ・カック・ヴォン(Dao Khac Vong)村長が付属の建物を開き私たちを案内して、手ずから伝統茶まで入れてくださり、説明をしてくださった。



村民集団虐殺があった村、2ヶ所に韓国が建てた学校があるというので、その学校を訪問した。(写真) 私たちがビン・ホア学校を訪問した日は、ちょうどその日学校で何かのお祭りのような行事が開かれており、たくさんの学生たちにも会うことが出来た。2000年に建てられたという学校はずっと補修をしていないので、納屋のような姿だった。職員室に入って校長先生から学校の現況の説明を聞いた。学生数は585人だが、教室が7つだけなので1つは職員室として使い、残りの6つで3部制授業をするという、教育器材や資材は教室ごとに見回って見たがほとんどなかったし、机と椅子も古いものばかりだった。

子どもたちの白く澄んだ顔とはまったく釣り合わない教育環境だった。

学校を見回ったあとには、校長先生をはじめとした一行12人と共に昼食をとった。食事をしながら尹貞玉先生は次のようにおっしゃった。

私たちの踏査旅行の要旨なのでそのまま書き写す。「私はここにいる2人と共に皆さんに謝罪しに来ました。私たちは南の韓国から来ました。韓国軍がここに来て犯した惨たらしい仕業について心から謝罪します。特に罪のない女性と子どもたちに加えたレイプと殺傷について謝罪します。私たちはここに個人の資格で来ましたが、韓国にいる多くの人々が私たちといっしょに一心に謝罪申し上げます。私はこの地球のあちこちを見てきました。その中でもベトナムは本当に美しい国です。低めの山はその線が柔らかく、田んぼは収穫しているところがあるかと思えば、黄色く実りつつあり、青く育っているところもあります。川が流れ、湖が澄んで、果物が熟していく本当に美しい国です。しかし私にはこのすべてのものより、皆さんがいちばん美しく思えます。皆さんは韓国と同じで南と北に分かれていました。その分断を皆さんの力で統一しました。フランスを追い出し、米国との戦争にも勝ちました。真の美しさは自分を守る力から発すると思います。自分を守る力なしには自分の美しさをあらゆる自分を発展させることができないでしょう。皆さんのこのような美しさに対して、私たちは本当に尊敬を表します。皆さんは本当に美しいです。」

私たちは、たとえ言葉は通じなかったとしても和気藹々とした雰囲気の中で食事をした。12人がベトナムの伝統料理とお酒まで存分に飲み食いしても、768000ドン（約60ドル）しかかからないところを見ると、ここの物価が安いことを知ることができた。私たちの若干の援助でもここの学校の器材・資材や教室増築など多くの役に立てるだろうという気がした。善良な隣家のおじさんのような顔をしたチャン・クアン・ビン(Tran Quang Binh)校長先生から、運動場の広さと教室の大きさなども参考までに書きとってきた。二番目に訪問したニョンフォン小学校が比較的きれいに運営されていたのに比べて、ビン・ホア学校が一層みずばらしかったのは、この村がよりいっそう貧しい村だからでもあるようだ。

### 3. レイプ被害女性たち

被害女性として初めに会った証人は、74歳のグエン・ティ・ビックおばあさんだった。すっかり擦り切れた服を着た、とても貧しげに見えるおばあさんだが、若かったときはかなり美しい姿だっただろう。当時の夫はベトコンであった。韓国軍が来て首に刀を突きつけて脅し、子どもを抱いていたのに子どもを奪って投げ、服を脱がせたという。レイプされたのかという質問には「子どもを抱いていたので……ほとんどされそうになった」とだけおっしゃった。これ以上はお話されないので、何度も聞いて見ることもできなかった。私たち一行は何人もいたし、男たちもいたからでもあった。着ておられた服があまりにボロボロで家の中も非常にみずばらしくて気が重かった。ずっと、申し訳なかったという私たちに、おばあさんはむしろ訪ねてきてくれてありがとうと言った。

韓国軍にレイプされた女性たちは男たちが結婚しようとしないので、ちゃんとした結婚をすることができず、それで1人で暮らしていたり、生活しながら父を知らない子どもたちを持った場合も多かった。グエン・ティ・ボンおばあさんは、1966年当時、18歳で、母親といっしょにいる間にレイプを受けたという。夫も無く、子どもも無く、現在まで1人で生きてきたとおっしゃった。1980年、父を明かさずに子どもを1人産んだのだが、頭が異常な子どもで、現在もありとあらゆる仕事をして生活を立てて行っているとおっしゃった。体もあちこち痛く、視力もよくないとおっしゃった。グエン・ティ・バイおばあさんもそんなケースであった。彼女も29歳のときに、3-4人の韓国軍にやられたという。結婚できず1人で暮らしている途中で父の無い娘を産んだのだが、その娘が稼いで生活しているとおっしゃった。15歳になった7学年の孫がいるが学費と生活費が充分でないとおっしゃった。耳もよく聞こえず、目に問題があるというのだが、白内障の問題もあるようだった。40年前のことだから思い出すのが悲しく恥ずかしいと言われる言葉に私たちが恥ずかしかった。

チン・ティ・ナムおばあさんは慰霊塔の彫像の中に刻まれた生き残った母子のなかの母親であった。7人の家族のうち、姑と2人の義姉(妹)、そして3人の子どものうち、息子と娘が犠牲になったという。彼女は両側で息子と娘が火に焼かれるのをただ見守らねばならなかった。動けば自分はもちろん、胸に抱いている息子も死ぬだろうから、身じろぎもできなかったという。大きな声で泣きながらずっと話をされるのに、通訳に聞いて見ると同じ話の繰り返しだと言うだけなのでどかしかった。当時、生き残った息子が1歳半で、そのほかに息子2人をさらにもうけて夫も生存しているという。私たちが出会った証言者のうちそれでもいちばん暮らし向きがましに見える方だが、もっとも激烈に話をされるのをみれば、そばで子どもが死んでいくのを見た人の受けた悲しみがいちばん大きいからだろう。泣き続けながら話をなさるので、聞いている私たちも脂汗が出た。

不幸は重なってやってくるという言葉がある。レイプされたおばあさんが障害のある家族まで扶養しながら生きねばならないチャン・ティ・ルン(80歳)おばあさんの場合は、あまりにも悲惨であった。彼女は当時、息子1人と娘2人がいて、食糧を探しに出かけた途中で3人の韓国軍に会い、やられたという。夫のブイ・ド(83歳)さんは、米軍の刑務所で3年3ヶ月間いて解放されたが現在は両目が失明状態で、後に産んだ娘も知的障害児で家族3人が非常に貧しく暮らしていた。政府から戦争補償金が出るが病院費がなく病院に行けず、赤十字社の助けで暮らしているとおっしゃった。

「この村はぜんぶがベトコンだったのですよ。しかし私は違いました。」当時ベトコンだという事実は誇らしい事柄になるのに、グエン・ティ・フオイおばあさんはこのように言った。彼女は1967年3月に野良に出ていて韓国軍人たちに出くわしたという。その後、兄と弟妹たちは結婚後、分家して、母親と2人で暮らしていたのだが、48歳のとき母親が亡くなり今は1人で住んでいるという。現在64歳で夫は無く1人で野良仕事をして生きてきた。今は土地はあって、牛が4匹いる。生きていくのに充分かという質問に「自分で満足だと思おうと努力している」と答えた。野良から帰ってきたばかりで土の付いたままのそのおばあさんの手と足に、このかんの労働の痕跡がそのまま染み付いていた。

1人でわびしい生活を生き抜くおばあさんたちがほとんどだったが、家族たちと団欒して暮らしておられて、それだけでも少し慰めになる方々もいた。グエン・ティ・トウイおばあさんは次のように証言なさった。「1969年当時、16歳だったとき、1人に一回やられた。父さんが村の人々と駆けつけて彼を殺そうとしたが村の人たちが止めた。部隊の上官に会いに行ったら彼が申し訳ないといい、食事に招待してくれたが断った。病院に連れて行かれ、病院で6ヶ月間過ごし、1年後に正常になった。健康もよくなりそのときから今まで具合悪いのだが病院代がない。現在51歳で両親が生存しており、結婚して夫もいて、2人の息子もいる。」私たちが訪問した女性被害者のうち最も裕福に見え、蒸しジャガイモ(San Luoc)も出していた。お父さんに当たる方は黒い色のサングラスをかけて傍らに座り、分かりやすく説明してくださったりもした。

よくみんなが「私は貧しい」と言うとき、その貧しさのレベルはどのくらいだろうか？グエン・ティ・ハイン(Nguyen Thi Hanh)おばあさんの家を見れば、そんな言葉は絶対に言えないだろう。彼女は16歳のときである1966年にレイプされた。野原に連れて行かれ一人は見張りをして4-5人にやられた。20日のあいだ閉じ込められていた。壁に押し付けて足で蹴り、指を刀で刺した。箱に入れた食べ物をくれたが、毒が入っているかと思って食べずに飢えていた。その後、トウイホア刑務所で1年2ヶ月いた。刑務所を出て家に帰ったら父が亡くなった。結婚はできず、父を知らない子どもが3人(息子2人、娘1人)いる。自分の家が粗末で恥ずかしいと隣の息子の家でインタビューをした。(写真)後で知って行ってみた家は倒れかけの穴蔵のようで、人が住む家だと思えないほどみすばらしかった。台所も到底、台所とはいえない状態だった。土間に器がいくつかあるだけで、屋根も雨を防げないほどに粗末に見えた。

死地から1人生きて戻った人々の話を聞いていると現実でない遠い漠然とした話を聞いているように思われることもある。集団虐殺で銃を撃つ前に先に倒れて助かったとか、油をかけて火を付ける時、一番下になっていて助かったとか、母親が腕で抱いてかばったので赤ん坊だけ助かったという、そして失神していて殺されることを免れたケースである。1966年、当



時 26 歳で夫と子どもがおり、5 - 7 人の女性たちが韓国軍 4 人にいっしょに捕まったのだが、自分は気を失って倒れ、気がつくと一緒に捕まった女たちはすべて刀で切られ死んでおり、死んだ女たちは当時 20 - 26 歳だったと証言したおばあさんもいらっしやった。当時、韓国軍の間ではレイプ後には必ず殺せという話があったという。

証言者のおばあさんたちは、最初のおばあさんと違い大きな声で経験した内容を比較的詳しく話してくださる場合がほとんどだった。当時、既婚だった方はお 2 人だがその方々は子どもたちもいるし、夫が後に死亡した場合は再婚もなされた。子どもたちも傍に住み、子どもが 10 人いる方もいた。家族も行き来する平凡な生活をしておられたが、ほとんどすべての方が経済的な困難を訴えられた。ほとんどが老衰して（お一人は 80 歳）あちこち具合が悪いとおっしゃり、みなさん病院で治療を受けられたらうれしいとおっしゃった。当時結婚して夫がいたとか、あんなことを経験したあと結婚した方々は暮らし向きが少しはよく見えた。しかしちゃんとした結婚をできず、父を知らない子どもたちだけを産んだり、一生一人で生きてこられた方々の生活はずっと貧しく見えた。

被害女性たちに会いに行くあいだ、女性連盟の方々は一日中、夜遅い時間にもずっと私たちと一緒に歩いた。彼女らの家族の完全な理解があるようだった。

夕食は、ほとんど女性連盟側のみなさんと一緒にした。クアンガイ女性連盟会長はその議会の女性議長でもあった。その女性たちは家庭や職場、そして職場の地位面で完全な男女平等を享受しているようだった。委員長や他の機関長たちとの対話でも気兼ねせず、対話や態度だけでは地位の高低を見分けることができなかった。もう一つ、特異だった点は私たちの運転手も同じ場所に座り、私たちと同じように対話に参加していることだった。韓国では車を運転してきた運転手は食事も他のテーブルでして、対話に入り込んでもこない。食べ物をもっと注文したりもして、私たちよりももっと口数も多いのが最初は少し変だったが、後になるとそうするほうがより気が楽だった。大部分の女性連盟の方々が食事の時にスプーンの上におかずも載せてくれて、ひっきりなしにもっと食べると勧める姿は、田舎のおばあさんの家に行った時のように情愛深く感じられた。

#### 4. 韓国軍 2 世たち

トゥイホア市で、フーイエン省女性連盟議長から被害者に対する説明を聞いた。1966、1967、1968 年度に韓国軍のレイプが多くあり、犠牲者たちはほとんど死んだという。生存女性 3 人と 2 世たち 2 人に会うというので心がいたたまれなかった。ドンホア県のホアビン村とホアヒエップナム村、そしてホアスアンドン村を訪問することにした。ベトナムで一番長いダラン橋でマー川を渡った。

グエン・ティ・フォンさんの家はきれいに掃除されており、庭には花も植えられていた。私たちは、初めはその人が韓国軍 2 世の母親だとは知らずインタビューを始めた。（写真）1969 年 9 月 - 10 月の間に経験したことである。当時 19 歳だったが道で出会った韓国軍 3 人が高い給料をくれるというので付いて行き、彼らのキャンプに連れて行きワインのような飲み物をくれたという。後で正気を取り戻しレイプされたと分かった。妊娠し産んで 1 人で育てたという。3 人のうち 1 人はキムと呼ばれていて、それで娘の名前もキムというそうだ。父親の分からない子どもがいれば、男たちは結婚しようとせず今まで 1 人で暮らしたと淡々と話された。娘のグエン・ティ・キムは証言の途中で感情が激しく突き上げ泣きながら話を続けた。「学校で誰も隣の席に座ろうとせず、家が貧しくて 7 年生で学校を止めホーチミン市にお金を稼ぎにいった。韓





国人にあってうれしかったが、韓国語が分からないのもどかしかった。お父さんに会いたい。お父さんを探して欲しかったが家族を苦しめるかと思って我慢した。おばあさんと叔母さんに会ったみたいだ。」と言い、私たちをつかんで泣くので、私たちが離散家族に会ったように抱いて泣いた。母の隣の家に住んでいて、夫は農夫で娘2人と息子1人が、みな勉強も良くできるという。南北離散家族が別れようとしないうちに、彼らは車の窓を開けて手を握った。私たちが乗った車が出発しようとするや母は両手に顔を埋めて、わっと泣き出した。あの人た

ちを悲しませているのは誰なのか？

トウイホアから80キロ離れたところに暮らす2世に会いに行った。グエン・ヴァン・ルオン (Nguyen Van Luong, 37歳) の母の名はレ・ヴァン・ゾー (Le Van Ro) であり、2004年に死亡した。(写真)母方の叔父であるグエン・ティ・ラーさんの証言は次のとおりだ。「1969年8-9月にレイプされた。正確な日付は分からず、雨季が始まる頃だった。兄弟姉妹が皆ベトコンだった。『スアンラック』というところで韓国軍が作戦遂行中だったが、彼女は知らなかった。捕まってレイプされた後、カチョ (cachot) という小さな隅っこの部屋のようなところで閉じ込められていて刑務所に移された。2年間、刑務所にいる間に1970年に息子を産んだ。監獄にいる時、他の人が子どもを連れて行って育てようとしたが断り自分で育てた。父は白馬部隊の大尉 (captain) だった。当時、ベトナム語通訳者がいたのだが、バイ・アイン (Bay Anh) さんだった。」2世は紹介なしに会っても同じ韓国人であるとただちに分かる姿だった。彼は生活が苦しくて7年生で学業を中断して農夫になった。1977年に結婚して娘2人ができ、上の子が小学校1年生だ。今は海に出て海老を獲って暮らし生活が少し良くなった。いちばん必要なものは何かという問いには「お父さんに会いたい」という言葉だけを繰り返した。「しかし戦争中に亡くなったかも知れない」と言い両目に涙を浮かべるのだが、これは見る者の心を痛ませた。私たちは同じ血筋だという言葉には、自身の腕の血管を指で掻いた。彼らが育つなかで経験しただろう苦難と差別と冷遇を考えると辛くて、見るだけでも気の毒で申し訳なかった。



## 5. おわりに

戦争は多くの被害者たちを残すが、時節が困難な時ほど、特に女性と子どもの犠牲がより大きいようだ。民間人虐殺で犠牲になった人たちも大部分は女性と老人・弱者たちであり、レイプによるトラウマ・永久的な精神障害を残す衝撃も女性だけが生涯経験する後遺症だ。わが国では日本軍挺身隊に連行され強制的にレイプされたことが個人的な羞恥として隠さねばならず秘め隠さねばならない出来事と考えられてきたために、挺身隊ハルモニたちには何倍も募る苦痛が伴った。

日帝時代の従軍慰安婦は、日本の長期間の計画された犯罪だったが、ベトナム戦争中の韓国軍レイプ問題は偶発的な犯罪だったので2世問題が発生した。そして社会主義国家として統一されるなかで国交が断絶さ

れ、父母を知らず育った2世たちが大部分で、自分の子どもが居るとも知らないとか、知っていても現在の家庭が壊れるのを望まず無視しようとする父親たちもまた、いるのであろう。しかし今は彼らを認め、韓国人として自らを誇りに思う感情を感じさせてあげねばならない。政府が立ち上がらなければ、団体でも立ち上がって2世たちのアイデンティティを認め、彼らの恨を解いてあげねばならない。ライ(lai)は混血を意味する軽蔑調のベトナム語である。だから私たちはライ・タイハンの代わりに2世(second generation)という用語で書いたこともあった。公式の資料がなく確実ではないが、韓国軍2世はざっと見積もって少なくとも1500人から、多ければ1万人までだと推算されたこともある。母1人の手で育てられた彼らは、たいがい貧困のために9年の義務教育以上の教育を受けることが不可能であったし、学歴が不足して就職もまともにできず、そうして貧困の悪循環が繰り返されている。「敵の子どもたち」と思われ、仲間はずれにされたり、隠れて暮らさねばならなかった彼らに手を差し伸べねばならない。彼らだけではなく彼らの子どもたちまで、きちんとした教育を受けて育つことができるように最後まで支援しなくてはならない。彼ら「悲しい血筋」たちは私たちが支援して責任を取るべき対象であるのだ。

帰国するとすぐに私たちは彼らを支援するための団体—韓国ベトナム市民連帯(Korea-Vietnam Friends)を作った。前青龍部隊旅団作戦補佐官だったイソンホ氏が「ベトナム戦争の特殊性と民間人被害の真相」で名づけた「一部不純勢力」であるわけだ。韓国—ベトナム市民連帯(ホームページ: [www.koreavietnam.org](http://www.koreavietnam.org))は韓国軍が参戦したベトナム戦争で被害を受けた犠牲者たち、特に韓国軍にレイプされた女性たちと韓国軍2世たちとその子どもたちを直接後援し、韓国で建てあげた学校を支援し、ひいては大韓民国とベトナム両国の紐帯を強化することで、平和を構築することをその目的にする。私たちがベトナム人たちに補償するときに最高に適切な補償はその国の教育施設をちゃんと備えてあげることではないかと思う。個人レイプ被害者を経済的に助け、その地の女性たちのための職業教育支援やセンターの建物建設も重要だが、その子どもたちのための支援がいちばん優先されねばならないだろう。

ベトナムの次の世代の主人公になる子どもたちの教育のために後援することが未来の平和のために投資することであるだろう。

私たちは日帝植民地時代に日本が私たちに行った無慈悲な殺戮と挺身隊問題のような反人倫的な振る舞いに対して「謝罪せよ、補償せよ」と要求している。しかし日本は妄言と歴史歪曲と靖国神社参拝で応えている。今までベトナム人たちは私たちに何も要求していないが、私たちはベトナム戦争で私たちがベトナム人たちに負わせた被害を忘れてはならない。私たちは韓国軍が行った民間人虐殺とレイプに対して謝罪し賠償せねばならない。その痕跡について無関心で無視したくてこっそり通り過ぎようとしてはいけない。彼らは忘れていなかったし、忘れようとしてもいないという事実を直視しなければならない。

私たちの恥ずかしい過去を謝罪し賠償し、彼らの古い深い傷を治癒して、心から染み出す和解を実現できる時、真の隣人になることができるし、平和がやってくるだろう。

【永谷ゆき子 訳】